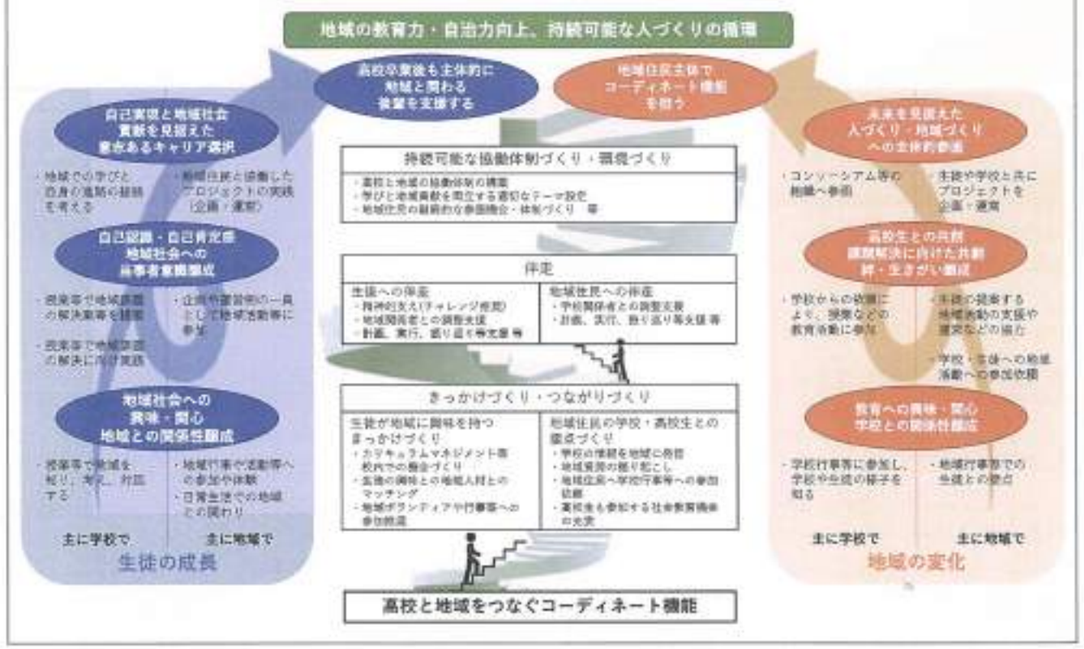
高校と地域をつなぐコーディネート機能の充実に向けて
―社会に開かれた教育課程と高校を核とした地方創生の実現を目指して―

1 持続可能な人づくり・地域づくりの循環に向けたコーディネート機能の役割とは？

これからの社会を生きる子どもたち一人一人に「生きる力」を育成するために、新学習指導要領では「**社会に開かれた教育課程**」という考え方が掲げられている。地方創生の文脈においても、第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」において、地方への移住・定着の推進に向けた若者の修学・就業による地方への定着の推進に際し、「**高等学校の機能強化等**」が掲げられた。その地域で育つ子どもたちの成長を軸に、教育と地方創生を両輪と捉えて進めていく必要があると言える。

そうした取り組みの先行事例では、**高校と地域をつなぐコーディネート人材**が重要であることが示唆されている。さらに、コーディネート人材にとどまらない協働体制(コンソーシアム等)も含めた**高校と地域をつなぐコーディネート機能**を充実させることで、生徒や地域は以下のように変化し、**持続可能な人づくり・地域づくりの循環**ができていく。

高校と地域の協働による生徒の成長と地域の変化イメージ



コーディネート人材を配置することによって見込まれる成果ついて、本事業の採択校・アソシエイト校に調査したところ、「**地域の特色を生かした教育活動が充実し、学校と地域が連携・協働した教育活動の継続性につながる**」と答えた学校が最も多く、次に多かったのが、「**地域活性化や地域貢献活動などの地域活動に関わる生徒が増え、生徒の学校外での活動に対しても評価がなされるようになる**」と「**教員が授業や生徒指導などにより力を注ぐことができるなど負担軽減につながる**」であった。一方で、配置する上での課題については「**雇用にかかる経費負担**」を挙げた学校が最も多く、次いで、「**コーディネーターの職務が不明確**」、「**学校や行政におけるコーディネーターの役割に対する理解が不十分**」と続いた。

4 高校と地域をつなぐコーディネート機能の充実に向けて、今後、それぞれの立場でどのようなことに取り組んでいけばよいか？

「社会に開かれた教育課程」と「高校を核とした地方創生」の実現の流れを推進していくため、コーディネート機能の充実に向けて、立場ごとで取り組むべきことを考えてみたい。

第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」では、地方への移住・定着の推進に向けて、高等学校の機能強化等が掲げられ、同「政策パッケージ」には具体の施策と合わせて、次の工程表が組まれている。

工程表（関連部分を抜粋して弊社作成）

	2020年度	2021年度	2022～2024年度
取組内容	高等学校と地域をつなぐ協働体制の検討 →	協働体制の構築、全面展開 →	
	高等学校と地域をつなぐコーディネーターの在り方の検討 →	コーディネーターの配置・活用 →	

また、都道府県単位及び全国で、各高校・地域の実践の支援や、各高校・地域の知見の共有や学びあいを促進する協働体制と仕組みの構築も必要である。

都道府県単位

○都道府県単位での現場支援・取組推進への協働体制を構築（教育委員会、知事部局、大学、教育系・地域系中間支援組織等）
○各地域のコンソーシアムをつなぎ、各学校・市町村単位では非効率的な施策や支援を県単位で推進

役割機能・施策イメージ
- 現場間で学びあう**ネットワークの構築・運営**
- 各現場の現状把握と取組促進への**伴走支援**
- 教職員・コーディネート**人材の養成・採用・育成**（社会教育士含む）
- 各学校を越えた**生徒の学びあい**・合同発表会
- 異なる地域のコーディネート**人材同士の相互支援やメンター制**
- 地域協働・探究の指導主事等の配置と**現場巡検支援**
- 各現場のコンソーシアム育成に向けた**チーム研修**
- 県外に出た**卒業生の関係人口化**の促進機会の提供

など

全国

○全国規模での現場支援・取組推進への協働体制を構築（全国的中間支援組織等）
○各地域がつながる場をつくり、県単位では難しい研究や支援施策、制度構築、先導的な取組を推進

役割機能・施策イメージ
- 全国規模で学びあう**ネットワークの構築・運営**（オンライン含む）
- 教職員やコーディネート**人材を育成する指導者の育成**
- コーディネート人材やアドバイザー等の**紹介・マッチング**
- 各都道府県を越えた**生徒の学びあい**・全国発表・表彰
- 各地域の**ファンドレイジングの共通基盤構築**・提供
- 先導的実践や**知見の研究・発信**（ガイドの作成等）
- 先導的コーディネーター（モデル）の**認定・表彰**
- 地域留学の**全国プロモーション・合同イベント**
- **評価ツールの提供・運用・分析**

など

都道府県
都道府県立高校の学校設置者として、自地域の高等学校改革について意志を持って検討する
- 教育委員会にとどまらず、地方創生の観点から知事部局も含めて検討（コンソーシアム構築の促進等）
- 都道府県単位での現場支援、取り組み推進に向けた協働体制構築を検討（人材の配置・支援、養成・研修等の実施等）など

市町村
自地域における人づくりの重要な機関の一つだと位置づけて、高校との関わりをどうしていくかを検討する
- 地域におけるコーディネート機能の充実（社会教育士等も活用し、地域において中核となるコーディネート人材を育成等）
- 人材を配置に際し、職務環境・条件の整備、日常的なサポート体制の充実、募集・採用時の期待する役割の明確化　など

高校管理職 教職員
地域社会と共に育てたい生徒像や学校のビジョンを描き、その実現に向けて取り組みを推進する
- 自校の現状を把握し、どういった取り組み・体制が必要か検討し、地域の関係者とともに対話をする
- 人材が配置する際には、校内において役割を明確に示す　など

大学
高校と地域の協働にとどまらない「つなぐ人材」の資質・能力を明らかにし、養成・育成を担う
- 教員養成課程や教員免許更新講習等でコーディネートに関する授業を行う
- 社会教育士の講習や養成課程の開設等　など

この報告書を参照いただきながら、各地で対話を通じて、それぞれにとって必要な形を検討いただきたい。

2020年3月発行

発行
三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社
〒105-8501　東京都港区虎ノ門5-11-2 オランダヒルズ森タワー
https://www.murc.jp/

編集
「高校と地域をつなぐ人材の在り方に関する研究会」運営事務局
一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム
〒690-0886　島根県松江市学園南3丁目3番地5　学園南ビル3階
http://o-platform.or.jp/

報告書ダウンロードはこちら

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/1418217.htm

2 必要なコーディネート機能（人材・組織）とはどのようなものか？その充実に向けてどのような方策が考えられるか？

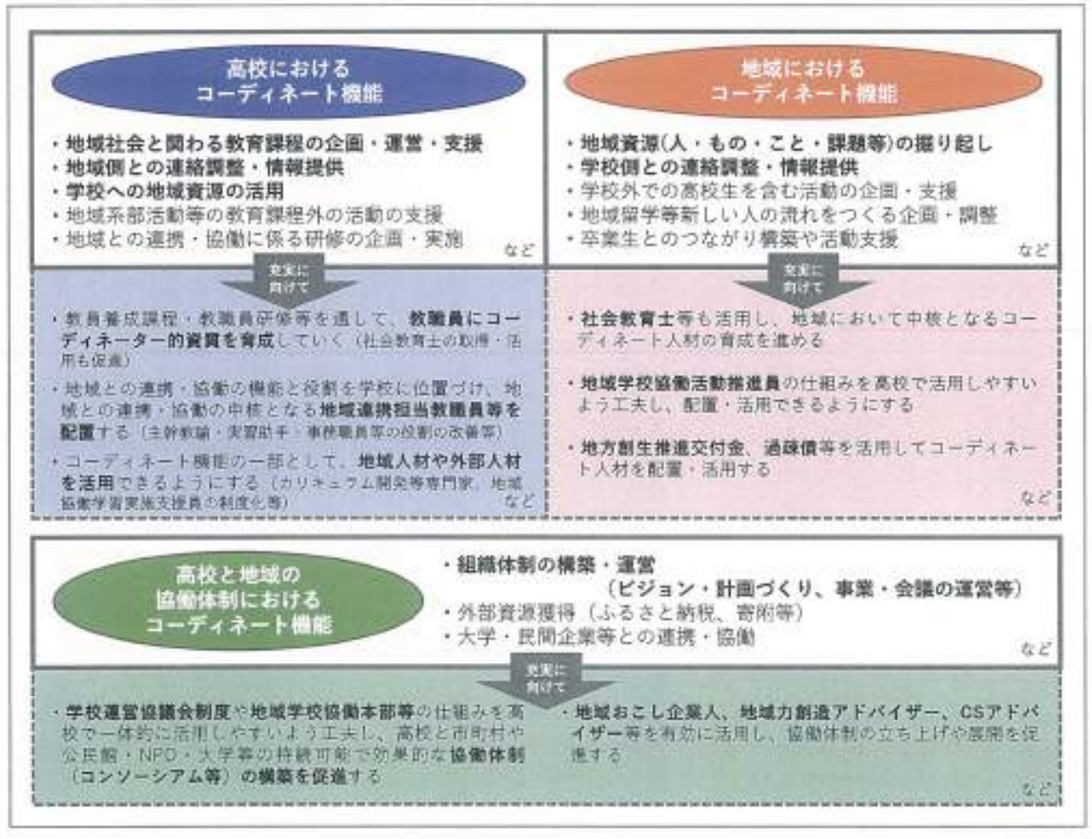
持続可能な人づくり・地域づくりの循環をつくるために必要なコーディネート機能を整理すると、

- **高校から地域に働きかけるコーディネート機能**（主に「社会に開かれた教育課程の実現」を目指す）
- **地域住民との関係を築きながら地域と高校をつなぐコーディネート機能**（主に「高校を核とした地方創生」を目指す）
- **高校と地域の協働体制におけるコーディネート機能**

の3つが必要であることが、先行事例からは見て取れる。

高校・地域のそれぞれの状況により、どのような立場の人材（もしくは組織や仕組み）がその機能を果たすかは異なるが、それぞれに含まれる役割は以下のようなものに整理される。

各高校・各地域が必要に応じてそれぞれの機能を充実させられるようにするためには、**省庁横断で制度の活用・改善・構築**を行っていく必要がある。また、こうした制度等は高校や地域が**実情に合わせて選択**できるようにする必要がある。



報告書の全文版においては、この3つの機能を3～4の具体的な役割に分け、さらに求められる内容によって、マネージャー、プレーヤー、サポーターと3つに分けている。3つの役割は以下のような内容となっている。

マネージャー
課題を設定し解決の枠組みを整え、全体を統括する

プレーヤー
設定された課題に対して、計画を立案・実行・改善する

サポーター
現場に寄り添いながら、計画の実現を支援する

それぞれの高校・地域に全ての機能が必要なわけではなく、自校・自地域に必要な機能はどの部分かを見極め、それを現状誰が担っているのか、もしくは必要にもかかわらず担えていないのかを見ていくことで、打つべき施策が見えてくるのではないだろうか。

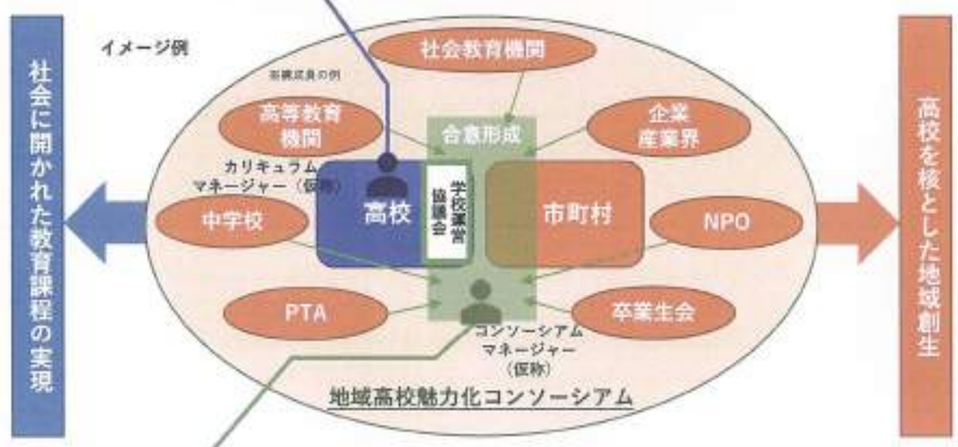
3 高校と地域をつなぐコーディネート人材の配置、高校における学校運営協議会・地域学校協働活動の一体的推進のイメージとは？

高校と地域をつなぐための新たな人材配置のイメージは、**高校における地域とのコーディネート機能**、特に、地域と連携した教育課程の中核としての役割を担う**カリキュラムマネージャー**（仮称）と、**高校と地域の協働体制におけるコーディネート機能**を担う、**コンソーシアムマネージャー**（仮称）を置くというものである。

さらに、人材を配置するだけではなく、**学校運営協議会と地域学校協働活動を一体的に推進**し、「社会に開かれた教育課程の実現」と「学校を核とした地域創生」の好循環の**基盤となる協働の組織体制（地域高校魅力化コンソーシアム）を構築**することで、より効果が発揮されると考える。

【カリキュラムマネージャー(仮称)の役割】

学校や地域の特色を活かした学校全体のカリキュラムの策定支援・実施体制構築、授業における課題発見解決型学習等の地域連携の企画・実施支援等、社会に開かれた教育課程の中核を担う人材。管理職を支え、学校全体の取り組みを牽引する立場を明確にして配置し、教員が担うケース、外部人材が担うケースなど多様な形が可能になると良い。



【コンソーシアムマネージャー(仮称)の役割】

コンソーシアムに関わる会議体の運営・ファシリテーション、コンソーシアムのビジョン・経営戦略・計画づくり、地域学校協働活動・事業の企画・立案、PDCAマネジメント、機能間/組織間調整、外部資源・資金獲得、広報・情報発信などコンソーシアムの事務局機能の中核を担う人材。地域人材の発掘や育成、教育資源の収集・整理等の地域ごとに多様な人材が担う機能の集約も行う。兼社会教育士も活用することが望ましい。

＜地域高校魅力化コンソーシアムの機能＞

- 協働体制の構築・運営（ビジョン・計画づくり、事業・会議の運営等）、外部資源獲得等の経営的機能
- 地域との協働による学校運営の改善や地域社会と関わる教育課程の企画・運営・支援等の学校教育的機能
- 地域資源の掘り起しや学校外での高校生の学習活動構築、地域人材の育成等の地域力創造的機能　など

こうした機能を担うためのコンソーシアムとしては、次のような観点が必要である。

- コンソーシアムは、ボランティアによる緩やかなネットワークに加え、**合意形成と協働活動を一体的かつ安定的・計画的・持続的に行える**ようにするための**構成員・規約・予算等**を有する組織とする。
- コンソーシアムの**構成員の代表者**がコンソーシアムの合意形成の場（学校運営協議会を兼ねることができる）に参加することで、学校運営協議会と地域学校協働活動の一体的推進が図られる。
- コンソーシアムの構成員は、高校・地域ごとの**協働の目的によって柔軟に設定**でき、**多様な形**が考えられる。**高校生自身**も参加できる機会があることが望ましい。

高校魅力化

コーディネーターという仕事

COORDINATOR

2020

チームで担う「コーディネート機能」

Consortium operation manager
コンソーシアム運営マネージャー

高校
×
地域

Coordinator
高校魅力化コーディネーター

探究
×
魅力

Practical teacher
実践教員

House master
ハウスマスター

発行／島根県教育委員会

本冊子では、島根県内の教育現場で働く
「コーディネート機能を担う人材」を取材しています。
生徒の成長や、学校や地域の盛衰に関わる彼らの想いが広がり、
共に未来をつくる新たな仲間が増えることを願っています。

令和３年３月
発行／島根県教育委員会
（島根県教育庁教育指導課地域教育推進室）
〒690-8501　島根県松江市殿町1番地（県庁分庁舎）
TEL：０８５２-２２-６１６５

編集／一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム
TEL：０８５２-６１-８８６６
http://c-platform.or.jp

学校と地域をつなぐ人のためのサイト
高校魅力化プラットフォーム　https://cn-miryokuka.jp/

高校魅力化
コーディネーターという仕事
COORDINATOR
2020

魅力ある高校づくりのために
学校と地域をつなぐ「コーディネート機能」

変化の激しい予測困難な時代。新しい時代に必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、学校と地域の連携・協働の推進が求められています。

島根県では2019年2月に『県立高校魅力化ビジョン』*1を策定し、生徒一人ひとりに、自らの人生と地域や社会の未来を切り拓くために重要となる『生きる力』を育むことを目指し、地域社会との協働による魅力ある高校づくりを掲げました。

この魅力ある高校づくりを推進する上で鍵となるのが、「コーディネート機能」です。教職員や地域人材、コーディネーターがそれぞれ必要な機能を担っています。島根県には約50人のコーディネーターがおり（2020年5月現在）、県立高校を活動拠点としながら学校と地域をつなぐ役割を果たしています。

（図1）

高校におけるコーディネート機能
- 地域社会と関わる教育課程の企画・運営・支援
- 地域側との連絡調整・情報提供
- 学校への地域資源の活用
- 地域系部活動等の教育課程外の地域探究や活動の支援
- 地域との連携・協働に係る研修の企画・実施など

地域におけるコーディネート機能
- 地域資源（人・もの・こと・課題等）の掘り起し
- 学校側との連絡調整・情報提供
- 学校外での高校生を含む活動の企画・支援
- 地域留学等新しい人の流れをつくる企画・調整
- 卒業生とのつながり構築や活動支援 など

協働体制におけるコーディネート機能
- 組織体制の構築・運営（ビジョン・計画づくり、事業・会議の運営等）
- 外部資源獲得（ふるさと納税、寄附等）
- 大学・民間企業等との連携・協働　など

参考：高校と地域をつなぐ人材の在り方に関する研究会
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/1418217.htm

＊1 島根県：今後の県立高校の在り方について
https://www.pref.shimane.lg.jp/gakkokkaku/szhen/kekizu.html

高校魅力化の鍵を握る「コーディネート機能」とは？

「コーディネート機能」は3つに整理されています。（「高校と地域をつなぐ人材の在り方に関する研究会」報告書、文部科学省、2019）（図1）さらにこの3つの機能を具体的な役割に分け、求められる内容によってマネージャー、プレーヤー、サポーターと3種類に表すことができます。

しかしそれぞれの高校・地域に全ての機能が必要なわけではありません。自分の高校・地域にはどの部分が必要で、現状は誰（またはどの組織）が担っているのかをまず見極めることが重要です。その上で、必要であるにもかかわらず担えていない機能を検証することで、専門人材としての「コーディネーター」の配置を検討する段階へ進みます。

「コーディネート機能を担う人材」の広がり

ここまで、あえて「コーディネート機能」と表現しているのは、必要な機能を特定の1人のコーディネーターが背負う必要はなく、チームで分担することが重要だと考えられるからです。コーディネーター、教職員、地域の関係組織のメンバー等の「コーディネート機能を担う人材」の連携によって、それぞれの高校・地域にあったかたちで魅力ある高校づくりが進められることが望まれます。

今回の取材では、実際の教育現場で働く「コーディネート機能を担う人材」を取材し、"コーディネーターという仕事"についてそれぞれの役割や仕事へのやりがいを聞いています。

生徒の成長や、学校や地域の協働に関わる彼らの想いが広がり、共に未来をつくる新たな仲間が増えることを願っています。

INDEX

02 - 03
学校と地域をつなぐコーディネート機能
▶ 島根県におけるデータ・育成に向けた研修

04 - 07
高校におけるコーディネート機能
▶ 島根県立大田高等学校
▶ 島根県立三刀屋高等学校

08 - 09
地域におけるコーディネート機能
▶ 島根県立隠岐島前高等学校

10 - 11
協働体制におけるコーディネート機能
▶ 島根県立松江東高等学校

島根県におけるコーディネーターの状況

島根県においては、2012年頃から「高校魅力化コーディネーター」が配置されました。当初はコーディネーターも少なく、1人のコーディネーターがすべての機能や役割を担おうとすることもありましたが、機能を3つに整理したことで教員とコーディネーターの分担や連携、学校と地域の連携・協働の進め方も整理されつつあります。

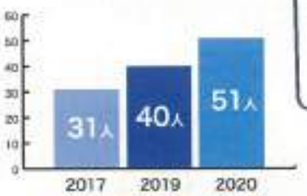
※2019年度より協働体制におけるコーディネート機能を担う人材について「コンソーシアム運営マネージャー」という形で配置

※2018年度の調査については、「高校魅力化コーディネーターというしごと」をご覧ください。

□コーディネート人材を配置する高校のある市町村

2018年度の調査では、コーディネーターを地域おこし協力隊や会計年度職員などとして市町村が雇用するケースが大半を占めていましたが、2020年度は、市町村が雇用するだけでなく、NPO法人や民間企業への委託等が全体人数の半分を占めつつあります。

□人数推移



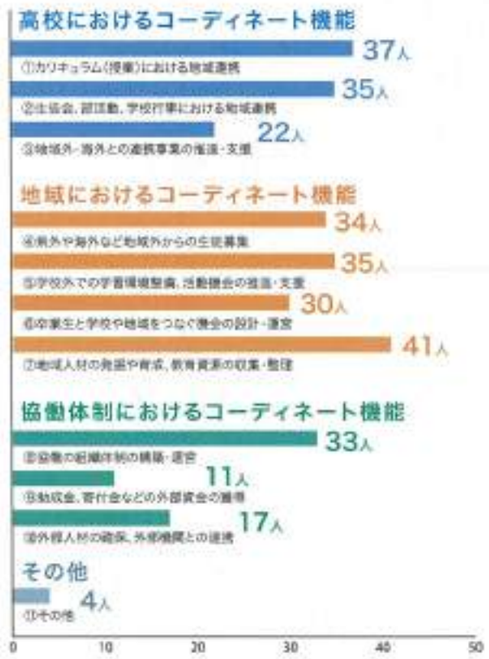
ひとつの高校に1人の配置というより、複数人を配置する高校が増えています。また複数の高校がある市町村では、チームで複数の高校を担当するケースもあります。

□年齢

高校におけるコーディネート機能を担う方は20代が多く、協働体制におけるコーディネート機能を担う方はある程度社会人経験を積んだ方が多い傾向にあります。

※2020年度島根県教育委員会による調査

□担当業務（複数回答）



育成に向けた研修

2020年度よりコーディネート人材（コーディネーター・コンソーシアム運営マネージャー等）の資質・能力の育成に向けた研修を実施しています。

また、コーディネート人材を対象としたメンター制度の開発に向けて試行を始めました。県内のコーディネーター同士の学び合いの機会づくりを目指しています。

＼研修参加者の声／
- コーディネーターとしての自分の役割は明確にしながら、関わる人との関係を見極め柔軟に活動をしていきたい（コーディネーター、1年目）
- 他校との情報交換の時間がすごくありがたいので、今後も実施してほしい（コーディネーター、2年目）
- 教員とコーディネーターさんが役割機能について整理し、今後に向けて持続可能な体制をつくっていきたい（教頭）
- コンソーシアムの運営に向けて他校の状況を聞きながら具体的に進めた（役場担当者）

コーディネート人材研修

「コーディネート機能とは？」「協働体制の構築のポイント」などテーマ別研修の実施

参加者　78人（2020年 全5回開催）

属性内訳　管理職（6）、教諭・講師（28）、コーディネーター（33）、自治体（9）、その他（2）　※1 円は人数

メンター研修

初任者コーディネーターと先輩コーディネーターによる毎月の個別面談

令和2年度　メンター5名、メンティー5名、相互メンター2名

高校魅力化
コーディネーター
森下 真穂さん

"先生"じゃないから価値が発揮できる 高校魅力化コーディネーターという仕事

神奈川から島根にーターンし、島根県立大田高校でコーディネーターを務める森下真穂さん。授業や放課後の時間を活用し、高校生と地域の人とをつなげている。「高校生たちの視野を広げ、世界を広げるきっかけを生みたい」と話す森下さんに、この仕事を選んだ経緯や業務内容について話を聞いた。

▼ 高校魅力化コーディネーター

教育の現場には、教師以外の選択肢も

中学生の時に出会った先生が素敵な人で、教師という仕事にあこがれるようになりました。大好きだった学校生活でしたが、苦労や悩みも少なくありませんでした。しかし、友人間の調整役を担いがちだった私を"真穂のおかげでみんなが落ち着いた学校生活を送れた"と評価して下さったその先生の言葉で、そんな日々が一気に報われました。

神奈川県の大学で、高校生のキャリア教育を考えるゼミを専攻。卒業後は、地元静岡県浜松市で中学校教員になるつもりでした。しかし、教員採用試験はまさかの不採用。ショックで親にも報告できずにいた大学4年の秋に、知人の紹介で教育イベントに出席し、教師以外にも教育に関わる仕事があることを初めて知りました。"教育＝教師"という選択肢しかないと思い込んでいた私の視界が"ぱあっと明るくなりました(笑)。

そのイベントで聴いたのが、島根県の高校魅力化プロジェクトでした。聴けば聴くほどワクワクする内容で、教育への関わりについて私の持っていた小さな常識が覆されていきました。居ても立っても居られず、翌週には一人で先進的な取り組みをしている津和野町へ向かう夜行バスに飛び乗りました。

輝ける大人になりたい

津和野町ではコーディネーター的な働き方をしているみなさんから話を伺いました。誰もがキラキラ輝いていて楽しそうで、もやもやしている自分が悔しくなるほどでした。楽しく働いている大人に出会えたのは、私にとって初めての経験。"私もあんなふうに輝きたい"。帰りのバスの中では、その想いであふれていました。

いつのまにか、教員採用試験に合格して帰郷するより、多くの人が選ばない「コーディネーター」という仕事にチャレンジする方が、私の中でのウエイトが高くなっていました。当時、教育魅力化事業を初めて立ち上げようとしていた島根県大田市で一から関わりたいと思い、進路を決めました。

一人からチーム連携へ

大田市教育委員会(以下、市教委)の面接に合格し、無事コーディネーターになれた私の最初のミッションは、大田高校の取り組みや生徒の姿を、地域の人に伝える広報誌づくりでした。魅力化事業に関しては、私はもちろん市教委も学校も手探りの状況。先生方との会議の仕方も分からず、総合的な学習の設計や運営も一人で行い、アップアップもがいているうちに一年が過ぎました。

2年目には、島根大学地域教育魅力化センター主催の地域・教育コーディネーター育成プログラムを受講したり、同時期に事業を立ち上げていた雲南市に定期的に視察に行ったりして、情報収集や人脈づくりに励みました。総合的な学習の運営も、ほかの先生方と連携するスタイルに変更。チームで取り組むことで学習の幅が広がり、校内でコーディネーターに対する認識も高まった上、その役割も逆に浮き彫りになってきました。一人で動くのではなく、学校や地域の方の力を得て、人と人をつなげる中で、新たな何かを見つけ、作り上げていくのです。先生たちと何度も話し合い、経験を積んでいく中で、地域をフィールドに自分たちの課題を見つけ、考えていく形が次第に整っていきました。

地域を舞台にしたプロジェクトが始動

地域の方々との結びつきが一層強くなったのが、放課後の学びの場「ダイコウラボ」を伴った3年目からです。毎週火曜日の夕方、私は活動拠点の「購買部」に"主"として待機。ふらっと集まってくる生徒たちと話したり、悩みを聞いたりしています。地域の方々がお菓子を持って遊びにくることも。そんな年齢や立場に垣根のない雑談の場から、数々のプロジェクトが生まれました。人気テレビ番組を模して、街を舞台にした鬼ごっこをしたり、LGBTに関心がある生徒たちが関連イベントを立ち上げたりしたこともあります。"面白い大人に出会えて、進路を考え直しました"と話してくれたのは、ラボのプロモーションビデオを作って地域の企業を回った男子生徒。多様な人と出会い、語り合うことで関係性が生まれるのが、ラボの一番の目的です。

地域の課題と魅力を知ることが財産に

そんな流れの中で今年度、2年生の「総合的な探究の時間」では、生徒たちに大田という地域の課題を自ら発見させることからスタートしました。地域探究学習では、生徒が決めたテーマに分かれて、社会福祉協議会や公民館などの事業者とも協力しながら課題解決を考えています。

先生方や私は、行き詰っているチームに問いを投げかけたり、時には一緒に考えたりしますが、基本的に生徒たちは自分で考えて動きます。地域とつながる中で、学校の外に魅力的な人や出来事がたくさんあることを知っていってくれることが生徒たちの財産になっていけばと感じています。

コーディネーター的教員になる

コーディネーターというのは、学校の中では異質な存在です。生徒にとっては、成績も知らない身近な大人。自分に対する評価を気にせずに付き合える数少ない大人ではないかと思います。親や先生には言いにくいことも、私になら言えるかもしれません。また先生方にとっても、地域に多様なつながりを持つ私の存在が、新しいチャレンジを生むきっかけになれたらと思います。地域の方々には、私が学校の窓口だということが浸透し、今まで敷居が高いと感じておられた方も気軽に高校に来て下さるようになり、新たなつながりがたくさん生まれました。

地域には、生徒たちの力になりたいという想いをもった大人がたくさんいます。"大田という地域だからこそ学べること、体験できることがあるのです。大田高校の生徒にとっては、市内の最高学府が大田高校であり、地元で学ぶ最後のチャンス。大田という地域を誇りに思えるような学びを生み出したいと考えています。

実は、地元の採用試験に通り、来期からは浜松市で教員になります。"コーディネーター"としての経験が私自身を育ててくれました。5年間の経験を活かし、学校と地域をつなげられるコーディネーター的教員を目指したいと思っています。

フィンランド在住の教育関係者にオンラインで取材(地域探究学習)

ダイコウラボ

週に1回放課後に生徒と地域の人が集まる学びの場を運営。「やってみたいこと」「解決したい課題」などを楽しく気軽に考える雰囲気だ。参加したい人が参加したい時に活動できる"ゆるさ"が魅力。

一日のスケジュール

8:30	登校。朝礼に出席
9:00	市教委に出勤。スタッフ会議で、事業の進捗状況などを報告。
12:00	学校に戻って昼食。購買でパンを買って、教員室で食べることが多い。
13:30	授業or先生や地域の人との打ち合わせ
16:30	放課後ラボ「ダイコウラボ」
19:30	帰宅
20:00	全国のコーディネーターらとオンライン会議やオンライン飲み会

島根県立大田高等学校
島根県大田市大田町大田イ568
https://ohda-hs.ed.jp/

現場の声 **価値観、視野が広がった**

島根県立大田高等学校
教育開発部教諭
大峰 昌裕さん

森下さんの存在は、学校に変化をもたらしました。これまで学校に来られる地域の方は、ほぼ生徒の保護者でした。今や町の電器屋さんや喫茶店のオーナーなどさまざまな人が出入りされるようになり、生徒の価値観や視野、可能性が広がってきました。社会に開かれた学びの場の意義を改めて感じるようになりました。また、全国に広がる森下さんの"ハンパない"人脈と、チャレンジ精神にはいつも驚かされています。

実習教員
石川 絵美さん

生徒や先生の想いをつなぐ「探究学習を支える実習教員」という仕事

新学習指導要領に設けられた「総合的な探究の時間」。島根県教育委員会は、令和2年度から全ての県立高校に探究学習推進担当者を設置するよう求めるなど、探究学習を推進する体制づくりに取り組んでいる。「探究学習をチームでやることを大事にしている」と、話すのは島根県立三刀屋高等学校キャリア教育推進室に席を置く、実習教員の石川絵美さんだ。

▼実習教員

チームで働き、サポートする

実習教員とは、実験または実習について、教諭の職務を助ける（学校教育法第60条第4項）ことを職務とする学校職員のことです。学校以外ではあまり知られていませんが、実習教員は「理科」や「家庭科」の他、「水産」「農業」「工業」などの専門教科で採用されることが多く、「探究」を中心に関わる実習教員というのはあまりいないかもしれません。

もともとは教員を目指していました。県内の高校を卒業後、島根大学（総合理工学部）で理科の教員免許を取得しました。最初は専門高校の講師として勤務しましたが、転機になったのが、特別支援学校での講師経験でした。特別支援学校では、ほとんどの授業をTeam-Teaching、つまり2人以上の教員がチームとなって行います。他の先生の授業をサポートしたり、一緒に授業したり、振り返ったりするのです。一方、専門高校では、1人で授業することがほとんどでした。特別支援学校の経験を経て、チームでやること、周りをサポートすることにやりがいを感じ、実習教員を志望しました。

探究学習をサポートする縁の下の力持ち

三刀屋高校では、キャリア教育推進室に配属され、主に探究学習のサポートをしています。探究学習には前任校でも関わることがありましたが、事務補助が中心でした。三刀屋高校では企画の準備段階から関わっています。

三刀屋高校の探究学習は、身近な地域課題をテーマに地域とともに解決策を考え、小さなアクションを積み重ねながら、学びを深めることを目指しています。また雲南市で生き生きと働くロールモデルとなる大人と出会うことで、自分のキャリアを決めていくヒントをつかむことも狙っています。1年次は「ゲストトーク」やフィールドワークを実施し、自分や地域のことを知ったり、チームづくりや探究の手法を学んだりします。2年次には、自分の興味関心に基づいたテーマを研究し、アクションを重ねていきます。

私の主な業務は、校務分掌や授業運営のサポートです。キャリア教育推進室内での打ち合わせを頻繁に行い、探究学習を進める上で必要な校内調整や地域との連絡調整（事務手続き）もしています。2年生の「未来創造探究Ⅱ」では、研究テーマをもとに探究班に分かれてフィールドワークを実施。私も自然災害と、自然環境の3つの探究班を担当しています。基本的には生徒が自分たちで研究計画を立ててフィールドワークを行いますが、研究が進むように教員が情報提供などのサポートを行っています。

探究学習について話し合う（左から鈴木さん・石川先生・小川先生）

自己理解ワークショップ（1年生）

地域フィールドワーク（1年生）

探究学習のアクション（ヒアリング）の様子（2年生）

地域の人たちを幸せにするために自ら実行（アクション実践）（2年生）

何ができるか、何が必要かを常に考える

実習教員は実験・実習の教科指導をはじめ、校務分掌など教育活動全般にわたる教育の専門職としての役割を担っています。サポート業務というのは、そのときどきによって求められることも変わります。業務の定義や範囲は明確ではないので、「今、何が必要か、私には何ができるか」を常に考えています。今年度は、探究に関わる研修に参加したり、他校の先生に連絡をして、探究学習の取組についての情報収集も行ったりします。

「探究って、教員みんなでやりたいね」キャリア教育推進室では、そんな会話が生まれています。先生方もいろんな思いをもっていて、関わろうとしてくれています。それをサポートし、チームをつくっていくのが私の役割です。

だけでなく、キャリア教育推進室や学年部のチームで進めたいと常日頃考えているからです。授業の進め方や内容について先生方の意見は様々です。他の分掌の先生方や、コーディネーターさんもいろんな考えを持っておられます。会議には出てこないような、つぶやき・もあります。多様な声に耳を傾け、想いをはせることが大事だと思っています。

もちろん、生徒の声を聴くことも大切にしています。生徒とは、学年部での活動や部活動、探究班などで関わる機会も多いのですが、一部の声だけを聴くのではなく、偏らないように気を付けています。いろんな方の声を拾うのは大変なこともありますが、自分の中で特に心がけている部分です。

大事にしているのは、先生や生徒の声を聴くということ

探究学習のサポートをする上で大事にしていることは、関わる人々の声を聴くことです。探究学習を一部の担当教員

島根県立三刀屋高等学校
島根県雲南市三刀屋町三刀屋912-2
http://www.mitoya-hs.ed.jp/

一日のスケジュール

- 8:30 朝礼
- 9:00 キャリア打ち合わせ、定例会議等
- 10:00 教科打ち合わせ、資料準備等
- 12:35 お昼
- 13:30 打ち合わせ、授業準備
- 14:00 授業（探究学習）
- 16:00 放課後　授業の振り返り、授業準備、分掌業務、部活指導（ソフトテニス部）
- 退行

現場の声　実習教員とコーディネーターの共通点

高校魅力化コーディネーター
（認定NPO法人カタリバ）
鈴木 隆太さん

探究学習の全体設計は、主幹教諭（探究推進担当）の小川先生と私が担当しています。ただ、企画の案が本当に生徒や他の先生の意向を踏まえて、実現可能なものになっているのか、客観的にみてどうなのか、については石川先生に相談します。学年部ごとの会議は定期的にありますが、1学年14～15人の先生同士の情報共有は会議の場だけではなかなか足りません。コーディネーターが常に職員室に常駐しているわけではないので、石川先生の視点にはいつも助けられています。

業務の範囲が明確に決められていないのは、コーディネーターも同様かもしれません。生徒が取り組むテーマも、探究学習のプログラムも毎年全く同じというわけにはいきません。人事異動などがあるため、校内体制も同じ仕組みを回せばうまくいくというものでもありません。実習教員もコーディネーターも必要に応じて、柔軟な対応が求められる仕事だと思います。

探究学習の推進において、石川先生は、なくてはならない存在ですね。先生方の想いを受け止めて、チームを繋ぐ人だと思います。

寮生と話す小谷さん

ハウスマスター
小谷 望さん

誰よりも近くで、信じて、手放す「ハウスマスター」という仕事

地域外の生徒の受け入れで重要な役割を担うのが教育寮とそこに住み込むハウスマスターだ。「教育寮は魅力化の肝の一つ。ただ設置するだけでは意味がなく、ハウスマスターの存在は大きい」と魅力化関係者からも重要視されている。いったいどういう仕事なのだろうか。島根県立隠岐島前高校「三燈」でハウスマスターを務める小谷望さんに、業務内容ややりがいを聞いた。

▼ハウスマスター

生活を共にする身近な存在

隠岐島前高校の魅力化の中でも、島外からの男子生徒を受け入れる「三燈」は大きなコンテンツの一つです。寮といっても、生徒たちが寝泊りをするだけの"箱"ではなく、高校生が人間力や課題解決力を育む大切な場所です。規則を守ることは当たり前ですが、生徒自身がルールを見直すことで、自治寮に近いかたちで運営しています。

ハウスマスターの仕事は三つ。①寮生の学びの伴走、②安心安全の生活の場づくりのサポート、③地域の人と寮生をつなぐコーディネーター的な仕事です。寮に住み込んで高校生と生活を共にしているので、教員や学校にいるコーディネーターよりもある意味では高校生の近くにいる存在だと言えると思います。とは言っても、日々の仕事は業務連絡と午後7時半の門限点呼と午後10時20分の最終点呼を見守るのが基本です。点呼は寮生が自分たちでやるので、「ハウスマスターの仕事はほとんどない」とも思っています。何もしないと思えば、それもできる。反対に、やりたいことがあればいくらでもできる。ハウスマスターの魅力は"責任ある自由度"にあると思います。高校生のプロジェクトにもよく関わっています。彼らがやりたいことと、自分の関心が一致すると楽しいですね。"高校生がやりたがっている"と話すと、地域の大人たちも積極的に協力してくれますし。この部分は、島前の規模とスピード感が大きいのかもしれません。

もちろん寮生とはよく話しますが、こちらから積極的に話し掛けるというよりは、"寮でも本気で学びたい"という人を全力でサポートしていますし、そういう姿勢でいてほしいと思っています。もちろん、気になる寮生がいれば、呼んで話を聞くこともありますよ。

あとは、打ち合わせが多いです。寮務主任の先生や女子寮のハウスマスターとの情報共有やコーディネーター、魅力化チームとの打合せ。職員室にもふらっと顔を出すことも多いです。寮生の体調管理面での情報共有も欠かせないので、養護教諭との関わりも多いです。休み(週2日)の日には宿直担当の先生が寮に泊まるほか、長期休みは寮が閉寮になるので、基本的には休みになります。

相手を信じて、待つ

ハウスマスターとして海士町に移住して4年目。最初の3年は地域おこし協力隊として、今は、町の集落支援員として雇われています。いろいろな挑戦をしている島前地域で、自分も"先"の予想できない挑戦がしたかった。前任のハウスマスターの存在もありました。

前任の方とは、東京の学生時代にシェアハウスをしていたんです。彼は毎日のように家に面白い人を連れてきてくれて、さまざまな人と話す中で、視野が広がっていきました。何かを教えてもらう場というよりも、対話を通して自分自身について考えることができる場でした。そういう場の文化を、その方は三燈でもつくろうとしていたので、その文化を引き継ぎ、発展させていきたいと考えています。

大切なことは、相手のことを絶対的に信じて、待つことです。多くの人はチャンスを目の前にしても、「自分にはできない」「答えが分からない」と自ら限界を決めてしまいます。そういう人に必要なものは"勇気"だと思うんです。チャンスを前に、バッターボックスに立つ勇気、そして、手にしているバットを振る勇気です。伴走者にできることは、まず待つこと。できた時にはそれを認めて、次の機会をつくり続けることだと思います。

島前高校では挑戦する機会にあふれ、学校の授業でも地域の人との関わる機会はあるのですが、その中でも、自分から機会をつくりにいくことが大事です。実際、寮を拠点にさまざまなプロジェクトも立ち上がっています。寮は、暮らしの中で"やってみたい"を形にしやすい場所なのだと思います。

「自分の仕事はなくなってもいい」

生徒たちからは「第一印象は怖かった」とよく言われます。厳しいことも言うからだと思います。でもそれは、本気で島に来た高校生に対して、本気で向き合いたいと思っているから。誰に対しても、"成長したい"と向かって来る人には本気で向かいたい。彼らの成長のためには、高校生を"高校生扱い"しないことが必要ではないかと感じています。

最近は寮生の中から、"ハウスマスターに頼っていては本当の意味で"自治"ではないのでは"、"自分たちでできるようになろう"というアイデアが出て、一時的に離れています。"戻ってほしい"と連絡があって、来週からまた戻りますけどね。本当になくすことができたら、それはそれで面白いことだと思います。

最近、海士町のまちづくりを担う「AMAホールディングス株式会社」で副業も始めました。ふるさと納税を通じて、町の資金調達をする仕事です。ハウスマスターの仕事には満足していますが、新しいこともやっていきたいと思っていたところ、声を掛けてもらえました。返礼品を出す一次産業の人たちとのつながりができれば、高校生にも還元できる。大人が挑戦する姿を見せることができることも、ハウスマスターとしての仕事のプラスになります。

これから教育寮をつくろうとしている地域に伝えたいことは、"寮を設置すればいい"というわけではないということですね。ソフト面も大事なんです。地域と学校で協働して魅力化のビジョンをつくり、そこに合うハウスマスターを選ぶことが、その地域の教育を魅力的にする上で大切なことだと思います。

就寝前の掃除の時間に、寮生に話しかける小谷さん

就寝前の点呼で、寮の課題などを共有し合う寮生たち

島根県立隠岐島前高等学校
島根県隠岐郡海士町福井1403
https://www.dozen.ed.jp/

一日のスケジュール

9:00〜9:30	寮務主任の先生と情報共有
9:30〜10:30	コーディネーター・女子寮ハウスマスターと打合せ
10:30〜17:00	フリー(地域の方と会うこともあれば、PCもこともある)
17:00〜18:00	生徒相談
18:00〜19:00	夕食
19:30	門限点呼
20:30〜22:00	生徒対応
22:20	最終点呼
22:40〜23:30	生徒対応
24:00	就寝

コンソーシアム運営マネージャー
(株)エブリプラン
野津良幸さん

多様なステークホルダーと共通言語をつくっていくコンソーシアム運営マネージャーという仕事

「高校魅力化コンソーシアム」とは、生徒の成長に向けて、多様な主体が参画し、魅力ある高校づくりに取り組む協働体制のこと。都市型の先導モデル校である松江東高校のコンソーシアム構築・運営に携わるエブリプランの野津良幸さんに話を聞いた。

島根県立松江東高等学校
島根県松江市西川津町510
https://www.matsuehigashi.ed.jp/

高校魅力化コンソーシアムとは？

地域と一体となって子どもたちを育む「地域とともにある学校」を実現するために多様な主体が参画し、魅力ある高校づくりに取り組む協働体制のこと。

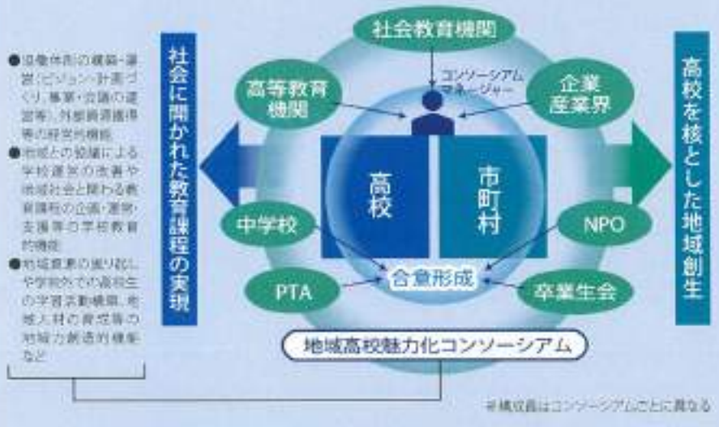
地域の子どもたちにどのよう育ってほしいのか、何を実現していくのかというビジョンを、地域の住民や市町村、小・中学校、社会教育機関、地元企業などと高校が協働で策定し、そのビジョンの実現を目指します。

また、高校魅力化コンソーシアムはコーディネート機能の基盤となり、コーディネート機能を組織として担っているとも言えます。

コンソーシアム運営マネージャーとは？

コンソーシアムの事務局機能の中核を担うコンソーシアム運営マネージャー（以下、コンソーシアムマネージャー）は、左記のような役割を担っています。

- ●コンソーシアムに関わる会議体の運営・ファシリテーション
- ●コンソーシアムのビジョン・経営戦略・計画づくり
- ●地域学校協働活動・事業の企画・立案
- ●PDCAマネジメント
- ●機能図／組織間調整
- ●外部資源・資金獲得
- ●広報・情報発信
- ●地域人材の発掘や育成
- ●教育資源の収集・整理



Q1 コンソーシアムマネージャーとしてどのような業務をしていますか？

A 現在、約1年半コンソーシアムの運営を支援させてもらっています。初年度となる昨年度はコンソーシアムを立ち上げることが目標で、今年度はできたコンソーシアムを持続的にしていく仕組みづくりをしています。来年度は県のモデル事業の予算なしに、自分たちで予算を確保しながら運営していく必要があります。

Q2 初年度はどのような動きをしましたか？

A 初年度は、ワークショップを繰り返しながら達成したいビジョンをつくっていくのが中心でした。コンソーシアムには、高校、PTA役員、島根大学、財団法人、松江市、商工会議所や中小企業同友会など、実に様々な背景をもったステークホルダーがいます。利害関係がどのような考えや想いを持っているのかを意見を出し合い、関係性をつくっていくなかで確認し、目線合わせをしていきました。

野々村校長と毎週のように打ち合わせを繰り返した

Q3 まず最初、入っていくにあたって難しかったことはなんですか？

A 入っていきなり喧嘩したといまだに言われますが、まず大学の先生、高校の現場の先生、企業の方それぞれに使う言葉が全然違っていて、そこはかなり苦労しました。対話していくにも、共通言語がないのでまずはお互いのことを知るところから始める必要がありました。

また、初めての大学との打ち合わせの際は、高校側がコンサル会社にコンソーシアム事業を丸投げしたとコンソーシアムメンバーから見られたことで誤解やすれ違いもありました。高校の主体性を問われ、本気でやる気があるのか」と言われ、会議の空気も凍りました。ただ、確かにコンサルが前にでるよりは裏方に徹するほうがいいとは思ったので、関わり方を変えていきました。

当初はコンソーシアムのマネジメント中心で想定していましたが、まずは現場の高校側に深く入って調整をしていく必要があると感じたので、高校の魅力化推進部メンバーに入れてもらうことで、高校にいる時間を増やして校長や事務長とも話す機会を増やしています。

Q4 多様なステークホルダーとの会議は、どのように進めていったのですか？

A コンソーシアムの中にワーキンググループが位置づけられており、その会議はワークショップ形式で開催しています。小さなグループに分かれ意見をだしあった後、全体に共有するという方法です。これなら参加者全員が発言でき、参加者同士が互いの考え方や思いを知ることにもつながりました。

議題は、「コンソーシアムはどうあるべきか」、「東高の育てたい生徒像」といった大きめのビジョンについてが多いです。現状と理想では何が足りていないかなと確認し、共通認識を持って方向性を確認する、「目線合わせ」をしていきました。

高校側のことも入った当初はまったく様子が掴めなかったのですが、校内魅力化連絡会（高校の管理職と魅力化に関連する各部の部長が集まる会議）をコンソーシアムの事務局と一体化させたことで、徐々に学校とコンソーシアムマネージャーとでお互い歩み寄っていけたと感じています。コンソーシアムについても先生側との情報共有が上手くできておらず、よくわからないまま発言もなかったのですが、高校側に深く入っていったことによって、会議やワークショップなどで発言し積極的に動いてくれる先生が増えました。

Q5 どのようにコンソーシアムを持続的な体制にしていくのでしょうか

A 今年度まで先導モデル事業として県が負担してくれていたコンソーシアムマネージャーの人件費を、来年度からはコンソーシアムで自立的に調達し運営していく必要があり、それが今年度の中心的なテーマです。誰がどう負担するのかもそうですが、高校が「コンソーシアムマネージャー」という役割が重要だと共通認識してもらう必要があると考えています。ワークショップを重ねながら、その話し合いの記録をとっていくことで、例えば校長が率動しても、この体制が必要なのだという基盤を固めていっている段階です。

Q6 コンソーシアムマネージャーに求められる役割や重要性とはなんでしょうか

A 学校の先生には目の前の教育現場のことを中心に考えてもらい、私などの外部人材はビジネス的な視点を持って将来の理想像から逆算し、今何をすべきかを示すことが役割だと考えています。ただ、現状ではコンソーシアムで大きな予算をつかって事業を推進するという状況ではないので、多様なステークホルダーに対して、ビジョンを意識しながら必要に応じてコミュニケーションをとる能力が求められます。自分が前に出るというより味、相手の意見を尊重しながら方向性を調整していくイメージです。

Q7 コンソーシアムマネージャーとして大切にしていることはなんですか？

A 自分自身の経験として、これまで高校は勉強さえすればいい場所だと思っていました。でも、せっかく頑張っていい大学に入っても、その先の目標を見つけられずやめていく同級生たちもいました。そういったことを減らすためにも、高校時代から大人が関わることで高校生にとって将来やりたいことがおぼろげでもイメージできるようになるなど、微力ながらでも自分にできることで貢献していきたいと考えています。

Q8 コンソーシアムマネージャーとして今後実現していきたいことはありますか？

A 今のコンソーシアムメンバーは、自身の仕事もあるため実際の高校の教育現場に入る機会は多くありません。理念先行での話とならざるを得ない部分もありますが、機会を作って現場を体験してもらい、リアリティを持ったかたちでディスカッションを深めていきたいです。

▼ コンソーシアム運営マネージャー

これまでの経歴

島根県松江市の出身。大学では電気電子工学を専攻し研究機関系メーカーに13年勤務。研究、事業開発、海外拠点での勤務等経験や代表職の経験を積む。その後松江市にUターン。起業の経験をたかし、バイオベンチャーの立ち上げに3年間わったのち、株式会社エブリプランに入社。コンサルタント業務に従事。

教育現場にコンソーシアムメンバーとの「関わりしろ」を持たせる必要もあると思っています。私自身も教育の専門家という訳ではありませんが、生徒たちと一人の大人として対話をするという関わりは続けていきたいと思っています。

コンソーシアムは高校魅力化という共通目標を持った多様な人々の繋がる場であり、それをまとめ上げて実現する仕組みを作って運用するのがマネージャーとして苦労するところでもあり醍醐味でもあると考えています。私では思いつかないような先駆的なアイデアを持った人たちも何人もおられ、そういった方々の力をお借りして、私の時代にはなかった新しい形の学びを将来を担う高校生に提供するため、いかに現場の先生方の理解を得つつ前に進めて行くか、試行錯誤しながら共創をしていきたいと思います。

仕事のやりがい

コンソーシアムマネージャーの話がきたときは、ぜひ引き受けたいと思いました。Uターンをして地元に対してなんらかの貢献をしていきたいと思っていたので、教育という分野で人づくりに関われるのは、またとない機会だと感じています。自分たちの子どもも通うかもしれない高校ですし、ひとごとではなく、これからの自分たちの地域のこととして取り組ませてもらっています。